

(件名) この11月になってから、Hi-net自動処理震源マップの「最新30日間」で震源深さ100キロ程度の地震が東北から関東の内陸部、相模トラフなどで目立つようになっていて、この一か月程度で、関東付近での太平洋プレートの沈み込みが活発化していることが伺えるため、首都圏大地震にむけて対策を取ることを求める陳情

(陳情の趣旨)

添付資料1は、Hi-net自動処理震源マップの「最新30日間」の今年11月22日現在のもので、添付資料2は今年10月30日現在のもので、比べると、11月22日現在のもものでは、震源深さ100キロ程度の地震を示す緑のドットが東北や関東の内陸部、相模トラフなどで、格段に目立ちます。自分は、311大地震以降、かなり頻りにHi-net自動処理震源マップを見ていますがこの11月22日現在のもほどの、内陸部などでの震源深さ100キロ程度の地震の多発を見たことがありません。

東北や関東の内陸部、相模トラフなどでの震源深さ100キロ程度の地震は、太平洋プレートの沈み込みに伴って起こるため、これ等の地域で太平洋プレートの沈み込みが活発化していることは確実です。

海のプレートの沈み込みが活発化すると、接触部から陸のプレートへの海のプレートの沈み込み圧力がより強く伝達されるようになり、結果的に内陸部や海溝部で大きな地震が起こりやすくなります。

なお、11月の中旬から日本では記録的な高気温が目立っていますが、ELECTROVERSEというサイト (<https://electroverse.net>) に記載があるように、同時期、ヨーロッパや北アメリカでは記録的な低温や大量の降雪量があり、北極寒気団からの寒気が偏って南下しているためと思われま。

背景には、日本付近での太平洋プレートの大規模な沈み込みによる海溝部からのマグマ熱の海水への熱供給があり、それが東北から九州にかけての上昇気流の発生を促し、結果的に日本付近での北極寒気団南下を拒んでいると思われま。西日本沿岸部でのフィリピン海プレートの動きは、基本的に伊豆・小笠原海溝での太平洋プレートの沈み込みによって駆動されているため、東北から九州までの高気温は主に太平洋プレートの沈み込みが活発化していることを意味して、太平洋プレートから陸のプレートにかかる圧力が増加していることを示しています。

そのため、かなり近い将来、M7首都圏大地震が発生したり、関東から関西までの扇状地（都市部のほとんどは扇状地に立地）でM5以上地震が今後100年程度は頻発するようになることが予測されま。

以上の趣旨により、鹿児島県としてどのような準備をすることが出来るかを検討する専門委員会を設置して、対策を取ることを求めることを陳情しま。

以上

(添付資料省略)